

令和6年度第4次 連合教職大学院 入学試験問題

[高度教職開発専攻]

小論文

注 意

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見ないこと。
2. 解答は、すべて別紙解答用紙の所定欄に記入すること。
3. すべての解答用紙に、受験番号及び氏名を明確に記入すること。
4. 試験終了後、この問題冊子及び下書用紙は、持ち帰ること。

問 以下の文章は宮口幸治著の『ケートの切れない非行少年たち』からの抜粋である。文章を読んでそれを簡潔に要約し、さらに内容に対するあなたの考えを加えて、800字以内で述べよ。尚、ここまでは次のような主張が述べられている。

「教室にいる『厄介な子（低学年から勉強についていけない、いじめに遭う、先生から不真面目だと思われているなど）』の背景にある軽度知的障害や境界知能は学校で気づかれないケースがある。そして非行に走ってしまった子どもたちの背景に障害の存在があることは、少年鑑別所で初めて気づかれる。教員による支援がうまくいかず、行き着く先が少年院だったということである。このようにして子どもが少年院に入るといえるのはある意味、「教育の敗北」とも言える。」

（横書き 800字以内）

褒める教育だけでは問題は解決しない

学校で気づかれない子どもたちはその後、どうなるのでしょうか。

学校に行っている間は、まだ先生が目をかけてくれる可能性があります。しかし、学校を卒業して社会に出れば、もう誰も目をかけてくれません。社会ではより要求度の高い仕事を与えられます。それで失敗すると責められ、嫌になって仕事を辞め、職を転々したり、対人関係がうまくいかずひきこもりになったりします。しかし彼らは、自分は「普通」であると思っていますので自分からは支援を求めようとしません。そして彼らは社会から忘れられてしまうのです。最悪、犯罪によって刑務所に入ることもあります。刑務所に入っている人たちの中には、学校で気づかれず、社会で忘れられた人々がいることは事実なのです。

こういった子どもたちを作らないためには、早期からの発見と支援が必要です。だいたい小学校の低学年からサインを出し始めますので、そのサインを見逃さず支援していかねばなりません。

しかし、ここでまた新たな問題が出てきます。子どもからの様々なサインを見つけたとしても、どう対応しているのでしょうか。現在の支援スタイルは多くの場合、「いいところを見つけて褒める」「自信をつけさせる」といったものです。子どもの能力に凸凹があると、苦手なことはそれ以上させると自信をなくすので、得意なところを見つけて伸ばしてあげる、いいところを見つけて褒めてあげる、という方向に行きがちです。

しかし「苦手なことをそれ以上させない」というのは、とても恐ろしいことです。支援者は、「そこは伸びる可能性が少ない」としつかり確かめているのでしょうか。もし確かめずに「本人が苦痛だから」という理由で苦手なことに向かわせていないとしたら、子どもの可能性を潰していることになりそうです。ある意味、支援者が障害を作り出していることにもなり兼ねません。

例えば、週に1回忘れ物をしてくる子どもがいるとします。これを「いつも忘れ物をしてくる」と見るか、逆に「週のうち4日は忘れ物をしてこない」と見るかで子どもへの対応は変わってきます。現代の「褒める教育」は、忘れ物を注意するのではなく、ほとんど忘れていない点に注目してそこを褒めて強化するスタイルです。確かに褒めてよくなることはあります。しかし、それでも週に1回忘れ物をするという状況が何も変わらないとしたら、褒めることよりも忘れ物をしないような注意・集中力をつけさせないと問題は根本的に解決しないのです。こうした問題が発生している場合の「褒める教育」は、問題の先送りにしかありません。

1日5分で日本が変わる

世間では、少年院に行くような少年は、手をつけられないワルで、社会に出てもどうしようもないと思われているかもしれませんが。確かに少年院経験者の再入院率は低くなく、成人になると刑務所にもかなりの割合で入所します。何度も入所を繰り返す累犯者もいます。そのような彼らを変えることはできないのでしょうか？ 本当に彼らは勉強嫌いなのでしょうか？

決してそうではありません。私はこれまで、少年院で見る力や聞く力を養うための、頭を使うグループトレーニングを何年も行ってきました。トレーニングは1回2時間ほどかかりますが、予想に反して彼らのほぼ全員が、2時間飽きることなく集中して取り組みめたのです。彼らの中には落ち着きがなく、社会でADHD(注意欠陥多動症)と診断された少年たちもいました。私が気を遣って彼らをリラックスさせようと雑談などすると、「先生、時間がなくなるから早くしましょう」と逆に叱られたりすることもありました。外部から見学に来られた先生方に、「まさか2時間もじっと座ってられるなんて信じられない」と言われることもしばしばありました。

少年院でのトレーニングの噂を聞いた他の非行少年たちが、「僕は馬鹿には自信があるんです。僕もぜひ仲間に入れてください。」と頼んできたこともあります。実は、非行少年たちは学ぶことに飢えていたのです。認められることに飢えていたのです。やり方次第で、非行少年たちでもいくらでも変わる可能性があるのです。学校にいる通常の子どもならなおさらです。それには1回2時間も必要ありません。朝の会の1日5分を使ってさまざまなトレーニングをすれば、子どもたちは十分に変わっていく可能性があるのです。